

Joy の声 (第7回)

大 泉 尚 美

整形外科北新病院 上肢人工関節・内視鏡センター

関西医科大学総合医療センター 中村優子先生よりバトンをいただきました。子育てを終えた立場として、仕事との両立について自身の経験を振り返り、今思うことを書かせていただきます。

1992年に北海道大学医学部を卒業し、北大整形に入局しました。卒後6年目で上肢を専門に選んだ翌年に出産をし、産休後は半年程度週3日の勤務、出産の翌々年に入った大学院では夫の米国留学に伴い3年半の休職と大学院休学を経験しました。外科医としては、一度手術から離れると復帰が難しいのではと不安を抱かれる先生は多いと思います。私は計4年ほど手術どころか仕事自体から遠ざかっていたわけですが、その後も何とかキャリアを続けることができました。状況に応じた働き方(非常勤、当直免除など)をさせてもらいながらも学会活動は続けるよう指導していただいたことと、母と義母が全面的にサポートしてくれたことが大きく、その点は恵まれていたと思います。臨床に加えて学会活動を続けることは正直つらい時もありましたが、その後自分を支えて



上肢人工関節・内視鏡センター同僚の先生方と
(前列左より吉岡千佳先生、末永直樹先生、筆者、
後列左より朴木啓悟先生、久田幸由先生、松橋智弥先生、山根慎太郎先生)

くれる自信と財産になりました。さらに、上肢を専門に決めてからの出産であったため、大学院の研究は時間と場所の融通が利くテーマを選択できたこと、復帰に向けての知識のアップデートは専門領域に集中して行えたこと、局麻手術などから徐々に再開できたことも、キャリア中断後の復帰の助けになりました。一度習得した手術手技などは、復帰時に少しの時間とサポートがあればまたできるようになることを実体験からお伝えしたいと思います。また、ライフイベントのタイミングは人それぞれですが、なるべく早く専門性を持つことは一つの選択肢かと思います。

2012年、2013年に日本手外科学会の「女性手外科医のキャリア」に関するシンポジウムにシンポジスト、座長として参加させていただきましたが、その際の女性会員へのアンケートでは家庭を持ちながら研修や専門医取得に苦労されている多くの切実な声を聞きました。2021年度からは日整会の男女共同参画委員として活動していますが、いまだ出産・育児に関して苦労の声があり、10年経っても解決すべき課題は残っているのが現状です。一方で、今の若い世代は男性医師も育児を担いたいという希望があり、時代の変化を感じています。私自身を含めた指導者世代の意識改革と、女性医師だけではなく男性医師や出産・育児以外の一時離職者も含めての多様な働き方や復帰支援などが必要だと痛感しています。

育児をほぼ終えて今思うことは、そのあとも医師としての人生は続くということです。育児真っ最中で余裕がなくなつらい、焦る思いをされている方も多いと思いますが、今できることをするだけでも助かる患者さんはいるということ、そして育児はいつかは終わり仕事に思い切り注力できる新たなステージが来るということをお伝えしたいと思います。ぜひキャリアを継続していけるよう応援しています。周囲の先生方も、育児を終えた医師が戻ってくることがひいては人的資源の充実につながるという視点でサポートして頂ければありがたいと思います。

